侵襲性肺炎球菌感染症の発生動向（沖縄県）

（1） どんな病気ですか

肺炎球菌（*Streptococcus pneumoniae*）はグラム陽性双球菌で、主に気道の分泌物中に含まれ、咳やくしゃみによる飛沫感染によって感染します。小児、成人に中耳炎や（菌血症を伴わない）肺炎などの非侵襲性感染症を起こします。また何らかのきっかけでこの菌が進展し、血液中に侵入すると、髄膜炎、菌血症を伴う肺炎、敗（菌）血症などの侵襲性肺炎球菌感染症（invasive pneumococcal disease：IPD）を引き起こします。小児や高齢者に多く見られます。

2013年4月1日から全数届出疾患（医師が診断すると最寄りの保健所に届出）となりました。

（2） 予防及び治療について

予防法として肺炎球菌ワクチン接種が有効です。5歳になるまでの乳幼児と、高齢者を対象※に定期接種が実施されています。（定期接種の実施者は市町村となります。詳細は各市町村窓口にお問い合わせください。）

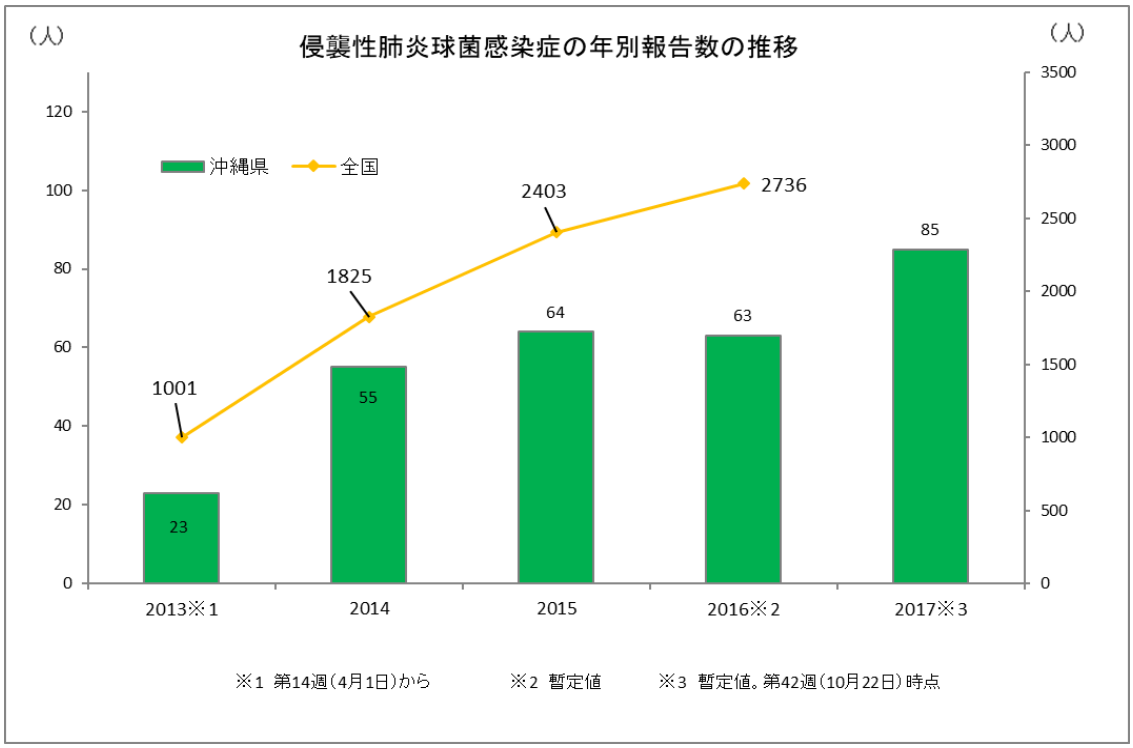
治療は抗菌薬が有効ですが、一方でペニシリン耐性肺炎球菌が増加しています。

※高齢者の定期接種の対象者は、
①60歳から65歳未満の者で、心臓、腎臓、呼吸器の機能 に自己の身辺の日常生活活動が極度に制限される程度の障害や、ヒト免疫不全ウ イルスによる免疫の機能に日常生活がほとんど不可能 な程度の障害がある者
②65歳の者

なお、②は2019年度から実施予定。2018年度までは経過措置として、毎年度特定の年齢になる者（65歳、70歳、75歳、80歳、85歳、90歳、95歳、100歳）が対象。

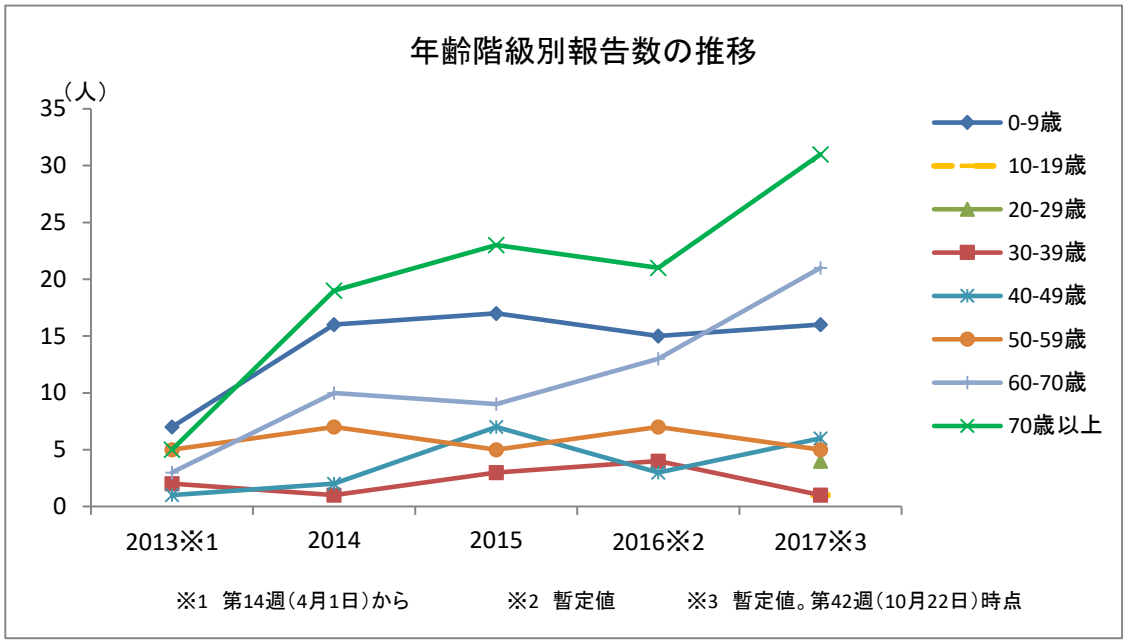
（3） 年別報告数の推移

報告数は本県及び全国ともに増加傾向にあり、本県においては2017年10月22日時点で85人と、全数届出疾患となって統計を取り始めた2013年以降、最多となっています。



（4） 年齢階級別報告数（暦年）

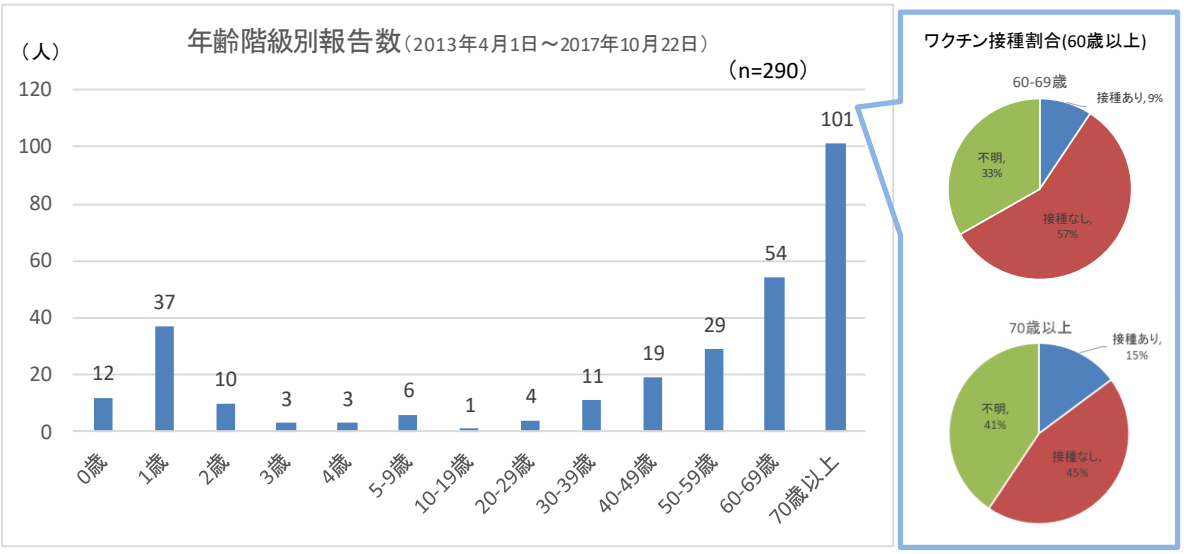
暦年の年齢階級別報告数では、0-9歳、60歳代、70歳以上に多くみられ、60歳以上の高齢者が増加傾向にあります。



（5） 年齢階級別報告数（2013年4月1日～2017年10月22日）

統計を取り始めた2013年4月以降の年齢階級別報告数では、1歳を中心とする乳幼児期と、70歳以上にピークのある二峰性となっています。

また、高齢者（60歳以上）の報告について、現在は高齢者の定期接種の経過措置期間中（2018年度まで）ということもありますが、ワクチン接種なしの患者は、60歳代で57%、70歳以上で45%を占めています。



参考

国立感染症研究所HP：侵襲性肺炎球菌感染症・侵襲性インフルエンザ菌感染症の発生動向
https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ha/pneumococcal/1375-idsc/iasr-in/4404-pr4082.html

厚生労働省HP：健康・医療　感染症情報　肺炎球菌感染症（小児・高齢者）
http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryou/kenkou/kekkaku-kansenshou/index.html